









口より海小確強と云つ海一仕事のやまを  
久くしをまゝありて何れ人もおぼへ  
るやまを命符争の料とて信がげよ  
何りとおしつたれんや其れ甚し  
仕事なることとてなまぬまに  
いふと天と地をれど家なり  
其れ多し強争の料を何れんや  
仕事とていふも何れぬ  
二星の頃といふ某時雜記よ七月七日の夜  
酒海とていふも何れぬとわや  
信えぬや

七夕のうゝの美葉集よよかたひ

何れ川水け草の様風おなひと

古今集より九河の形恒

年といわさといふ七夕のぬるよ

まゝの若菜無風

焚きむらうをけりて七夕の年よ

終指遠集小指天細き

海り世地終りてふ天のわ

新拾遺集より茶園の古大臣

いづれを總ぬらりて七夕の節よ

新法撰集よき治親王

中今所お作をわく一友乃た之世契けり終りなれり  
七夕乃竹枝牧

雲階月地一おる来抵經年引恨多最如明朝  
波車雨不交回脚波天河

又 墨琳系

野澤与波斗柄牧猪慵鳥慢ゆ移運美使精衛  
塩河澤一水還魚有冬時

又

織女牽牛雙扇開年一友五河某言天上

猶お見程勝人間去不回

○今日常盤とくふ車りり十節記よとくむり  
氏乃好子七月七日は記すそ重鬼報とたり今瘡  
病とすしむろれ病日はねよ麦餅とくろくゆふ  
そ危日はりりそ素餅とくろくの重とする後  
人これ日常餅とくろく瘡痛とうれえり

は後たりり方りお所とくす此瘡の外風を  
異淫と威し肉飲食色恐し傷れれも病りよの  
月経母を夏傷れ異秋は瘡癒と力そりおれり  
よく擡生をのづううれそんたとい世

日索解と食したるをて病根元より所一分  
く此類とまぬる事物んや決して此類  
所一也所人か所言と作てん

○今夜二星くあるとて此果とばぬ念物とせり  
香花のころも半くくは五色の糸をつく様も也  
とて男女のこも根能事物といひお友これと乞巧  
歎のやありて衣服と膝一書とてさる事  
ありて事半白存といひ天年勝實七年にんりあり  
しよと事推ほよ見えたり 織女空乃彼実無空  
は遊御守とて作あり 又  
七夕早ふ少分と遊舟を華乃悉れと現とてり

て捲り多よやくり勢勅推集の奇よ

あまのあさるまのまはふ初端捲りてはは  
乞巧奠乃事案財化風生花とてよ乃て皆れはこれ  
又うれ如久しと事なり人いれと婦人女まの  
たも事まにば事とたさ六於可なり趣とたて  
乃とてお事よはありと書籍衣服とてさるは  
の團ふと事とや都津を腹中の書とては  
況感を擗鼻禪とていふと多とて色はり  
今多事よ結因法師の事

七夕乃若れ衣とてり人かてり

漆身更り七又乃為也

又昔の文也人云く此物乃家蕃教習新秋送予也事  
多思惑不招人間乞巧橋

搦抄ウ七夕此持

楽余奉 半急急何 須遊 紙身并金控 年乞典  
人間巧不遊人乃巧持也

○今日草丸と合せ麴と化てトトと雪は月令より  
たりは日皮裏と曝せに短く重後七織に  
又角蒿と取く世禰書親れ中よ玉の毒と碎く  
お塾事親よ刀より

十一日二日より今日まで乃乃取らるる日毎一  
燐塵と拂ひ塵と知りて塵埃とたふさぐ  
へ一凡燐塵をとらるる一年に二ひりたり  
よ一冬燐塵とほくさとも日ごとく天を  
よくまはる事多されは疎略ありは月より  
よく早やぐく信れたるあつひとひてよ  
○生る人乃移換して世をよりおよむやう  
るより酒市のみとあがり又客とをひきり  
よ乃世よりつらきなり今乃世倍よる  
たり死せる人をもよとまらるる今も人





かくはほこしなるらりし事とく久しとて言て聖人の  
 道よやなきは世禮義あり（世にたう）西道よ志何人のあはれ改（かへ）  
 さらんや（先子のいそく）韓魏の俗を改むるは女（むすめ）  
 とて修又志のざんとなつて先祖乃祭を重んずるは食と  
 らぬ墓所よりと孫一墓所又焼籠との燃すし  
 先祖は重んずるは食とすなりは孫孫のて祖先は  
 なるらりしにすくはん今夜も世俗をそりて親  
 愛の人の墓よりと孫一親所の人のあはれ改むるは  
 事久の親あり人の事きしなるらりしを母や父は  
 なるらりしにすくはん今夜も世俗をそりて親

凡案附れ在るは志とてうしやふ事一多一中  
 とも七月十五日盂蘭盆の夜に佛修より一  
 目蓮母と救ふ事とてうしやふ事一多一中  
 孝危筆記よりなるは中元と素燈と先祖一  
 らぬ竹とてうしやふ事一多一中  
 母行これと竹のたれよりけ出と竹とてうしやふ事一多一中  
 修の方湯とてうしやふ事一多一中  
 やりよ又孝母報を竹とてうしやふ事一多一中  
 小織籠富たると盂蘭盆とてうしやふ事一多一中  
 先祖と孝一秋代事とてうしやふ事一多一中

しるし風俗とくわきんれいなり事とゆゑき  
源氏目蓮の事と海會しては傳へ孟董益經  
才・しるし書と他りて孟董とあはむじくしわ我 國  
みく孟董益乃休事ととの事聖武帝の天平  
四年の始より一續日本紀より云ふ天平  
の事魏を大奇しと云ふ大細

きよくそや内苑花はつとゆふむまきつて又月がこよ  
○五雜紀よりく七月申元日孟董益會となり目蓮の  
母德鬼道女漏下あり功徳と強く徳の徳鬼と  
志く食とらるしとひせむとての世俗たとひ源氏

乃後よまらうとてもいそりそれ祖考の天皇に登り  
極樂世界のよまらる事とゆふまじして儼鬼よな  
てこれとまらるる事ありと云ふ其の事あり

○能書より十七八載まき高橋のあゆみの元知の境  
勢と燃す教工とあつてはるく乃物物とさう人  
乃尺のれさる 申元不飛龍と燃とるは後堀門院書之長乃お  
ぼよ始より一孟董益會の事月記より云ふ  
ゆりもろくはにまの初申元下元とも不燃と燃すも上元  
の事くそりしるしも源氏の同しと云ふことありて  
又雜紀より云ふ

○又と日世俗の海乃漁獲とせ候とらるしとての事  
もや危の百も書し申元日他佐詞不採魚と云ふなり



十六日 國活し日男女の世に遊樂と事とす又やどゆりて  
奴婢のいふこといふことあつて父母兄弟の對面する自  
○今世を病む者あつて赤壁に世に世に月と黄世に世に  
秋の月をいふことあつて八月十九日九月  
十日夜をいふことあつて七月の月をいふこと  
なり好事の人の事あつていふことあつて今夜は  
月と黄世と事とす

晦日 沐浴

は月夜涼冷なり夜と厚く曇る風後雨の満る事  
をいふ事万勝理子も表氣うとととと風なり

感<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>わ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>感<sup>カ</sup>冒<sup>カ</sup>傷<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>痰<sup>カ</sup>嗽<sup>カ</sup>喘<sup>カ</sup>急<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>病<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>情<sup>カ</sup>  
てこれと遊へ

は月を標と雲を標漆と取<sup>リ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>なり

と去<sup>リ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>なり水<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>なり

加<sup>カ</sup>へ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>なり水<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>なり

志<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>なり

又<sup>カ</sup>志<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>なり

湯<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>なり

盆<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>なり

盆<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>なり





ありて、宅中へハ菘蔓菜とつゆくまけハ菘食たり  
 ありハ八月の後ましくハ菘苗を中すくありこれ  
 ちやくあぐれ根あり七月初ましくハ菘苗幸  
 菘苗も菘苗と同所へましくハ菘苗の根あり  
 宅中へハ生ましくなりハ菘苗とハ月  
 乃初ましくも可なり大菘中菘等ともハ大菘ハ苗  
 とわりちうち菘ハ根とハ  
 八月の末ましく皮とむむは法ま橋と取たりごとま皮  
 とむむ日み乾す  
 此月蔓と食よりかたりましくハ場農あり人と害す進と

食ハ目と持す麻様をくくハ氣とくくハ菘蔓  
 とくくハ菘蔓とわぬ息乾と多く食ハ人と傷ハ  
 菘と食ハハ氣とくくハ次ま密と多く食ハハ菘蔓  
 乱を多しハ菘蔓と食ハハ菘蔓肉多く食ハハ菘蔓  
 と持す之秋乃後菘餅及水波餅と食ハハ菘蔓  
 五林ハ後十日凡と多食ハハ菘蔓  
 七月菘蔓菘蔓とくくハ冷水と多く吞ハハ菘蔓  
 尚ハ害たりハ後日ハ取りて病と生す又七八  
 月乃乃菘蔓とくくハ菘蔓の時節生冷ハ物果  
 と多ハ食ハハ菘蔓ハ氣固ハ滞ハハ瘧疾とハ





内と云ふこのありきりなるともP傳へたりとれを道に置  
 色たりたり事なりすこの志を承らんかりたる年  
 化を分明なるは正しくは後世流乃由世世代明か  
 ありたりたりなるも知るよ今年中は事れ中に  
 去るはつたり事<sup>見</sup>なりしと云ふもはしる事は世々の  
 つよよしてはしぬこち世に事れは正しくは伝へ  
 於く海とく一夫大御事事少くも是れ先く海家  
 ましと云ふ又鴨<sup>鴨</sup>明の四季抽格よとくはわたりあり  
 ありと云ふぬれはのほりもひとてむしはしる事  
 たりはざりしと云ふ松乃そくと云ふ人今とてましは御事

一はたしくまつりう知くは代よはせなすよとて  
 直る乃者ぐもはせは新たるもつれしなり  
 いかせよとくもまはつりやうまはらわたり  
 らくそしつりぬあり内巻のつらむり所ハ  
 わつりかここれ事はつりまつり又三月よとこ  
 かりくかまわしとこなるはゆせしとこれ事なり  
 此事をこましの結よしとてはわつりそしつり後  
 とり結之ぬれと今もあらぬとてあつてたぐ  
 まつり事なり

今案こころにたはむりぬりしつりてえとて事

の物終れ後より多しとて始まる事よ久しき事  
了る人終りされど延壽式に家法事あるを足  
る所をわく西史よもあつたされいぶくもそく  
ゆり終る事根柢乃後とわすこととて一とて  
近世しては中一ゆり世の事物終ると書く  
よくその物書る人々終りもとてゆり事  
をせしむる多し今世書よ外周の考よ  
ゆり事よ又今しそふ世よ秋の田穀乃の事  
とてよ世の事ゆり事とてゆり事  
あつたは月朔腰となすゆり事と騰騰といふ

月令廣義潜確類考をよみてはるる時ハ田穀ハ新  
かりと終る事ゆり事とてはるる月朔の終る事  
り終る事とて

○今日 楚社より 將軍家よ物ゆり又 將軍家  
ゆりもゆり事とてはるる事とてはるる事

十四日 明夜ハ 終明後ハ 八月十日に是れゆり  
事とてはるる事とてはるる事

銀屋サレ考 露降垂玉 露初と秋 園味 露降垂  
宜先 貴明夜 露降垂 可也

十五日 中秋といふ秋 九十月はるる事とてはるる事 園味



月又のろくはるし骨餅と繋いでさく  
 状は他の月餅と繋いでおとす又月餅西瓜  
 等と合して看月會ともふりし月令廣く  
 歐陽詹既月時序云月之為既其別整氣大寒  
 別蒸重火契平蔽月若後入蔽与後信言既秋之  
 於時後夏先冬月於時季如孟秋十五於既月  
 之中秋於天送別定無均取於月數別埃兔園說  
 埃墟不流大定修學娟徘徊每上深昇東林  
 入西樓肌骨与之疎涼秋氣与之清冷  
 ○事云爾玄月秋之月也水之精也全氣

全水性也。五外分其事。別知天說。同。秋感各一。氣  
 水。全還。蓋月。固秋。更清。氣。秋。役之。於人。惟不。信  
 後古集。天房。乃。所。可。

月之。今。月。乃。是。之。時。の。事。ひ。乃。月。之。月。乃。是。

新勅撰集。一。中。遠。法師。

何。事。ハ。又。博。其。事。也。如。人。ハ。如。月。乃。於。此。の。事。

全。集。集。之。源。氣。房。

博桑齋時評卷五

七



張景安の中條乃詩一

万子秋空掛玉盤  
樓香<sup>も</sup>愁<sup>も</sup>空<sup>も</sup>望<sup>も</sup>四河此月  
骨<sup>は</sup>骨<sup>は</sup>人<sup>は</sup>自<sup>は</sup>今<sup>は</sup>骨<sup>は</sup>冷<sup>は</sup>眼<sup>は</sup>看<sup>は</sup>

雜詩

夜<sup>は</sup>池<sup>は</sup>邊<sup>は</sup>月<sup>は</sup>生<sup>は</sup>邪<sup>は</sup>悲<sup>は</sup>此<sup>は</sup>夜<sup>は</sup>易<sup>は</sup>天<sup>は</sup>明<sup>は</sup>還<sup>は</sup>雅<sup>は</sup>引<sup>は</sup>取<sup>は</sup>

秋<sup>は</sup>江<sup>は</sup>水<sup>は</sup>添<sup>は</sup>入<sup>は</sup>銅<sup>は</sup>壺<sup>は</sup>報<sup>は</sup>曉<sup>は</sup>更<sup>は</sup>

杜子美詩

滿<sup>は</sup>月<sup>は</sup>飛<sup>は</sup>明<sup>は</sup>鏡<sup>は</sup>傳<sup>は</sup>心<sup>は</sup>折<sup>は</sup>大<sup>は</sup>刀<sup>は</sup>勢<sup>は</sup>蓬<sup>は</sup>以<sup>は</sup>地<sup>は</sup>盡<sup>は</sup>攀<sup>は</sup>桂<sup>は</sup>仰<sup>は</sup>天<sup>は</sup>之<sup>は</sup>

水<sup>は</sup>路<sup>は</sup>疑<sup>は</sup>霜<sup>は</sup>雪<sup>は</sup>林<sup>は</sup>樾<sup>は</sup>見<sup>は</sup>羽<sup>は</sup>毛<sup>は</sup>此<sup>は</sup>時<sup>は</sup>膽<sup>は</sup>白<sup>は</sup>兔<sup>は</sup>重<sup>は</sup>欲<sup>は</sup>數<sup>は</sup>秋<sup>は</sup>盡<sup>は</sup>

邵康節詩

一年一度中秋夜  
十度中秋九月滿  
未滿在頭面

夜<sup>は</sup>中<sup>は</sup>露<sup>は</sup>明<sup>は</sup>仍<sup>は</sup>候<sup>は</sup>到天<sup>は</sup>心<sup>は</sup>重<sup>は</sup>照<sup>は</sup>憂<sup>は</sup>情<sup>は</sup>非<sup>は</sup>淺<sup>は</sup>不<sup>は</sup>睡<sup>は</sup>

親<sup>は</sup>時<sup>は</sup>志<sup>は</sup>深<sup>は</sup>流<sup>は</sup>老<sup>は</sup>古<sup>は</sup>人<sup>は</sup>詩<sup>は</sup>句<sup>は</sup>好<sup>は</sup>何<sup>は</sup>堪<sup>は</sup>千<sup>は</sup>里<sup>は</sup>世<sup>は</sup>如<sup>は</sup>今<sup>は</sup>

○今夜觀畫象と海の花を以てそのつと多しと

月令度義は月をくると又のく牡丹と梅一載る事

今日一と一常を宣く候る代根と淨く候一

香酒といく流ハ九妙なり

二十七日孔子ハ生れ給ひ日あり  
これ孔子の教あり  
此が後院あり

晦日 沐浴

そろくく一と社日とく三秋乃後才又の成此日土ハ





月半の夜郊野は越銀す  
は月半の地何人の秋穀と煮て征之の蓋を以て  
る此ら親戚と客乎

此月強風あり何人多く風は感して瘴性く風は越  
宅中より上より松葉書と前へ宅中より露後  
くやぐ様はよふくすは月半のやとすは月半の  
萬草茂穢も上向の初前へ萬草はかきくゆは  
おのり生れし二月はさうゆは  
はあり響葉はあまきく中秋のは様へ  
さくはよふすは月半のやとすは月半の

わつたれは生れかきく土はこれにまひやうく  
けきはいたがわひはさくはさくはさくはさく  
へはこれに苗生してまをれとばくはまはさく  
紅豆はこくと收垂へ楸木葉と生れはさくはさく  
たおよりのまはせははははははははははははは  
てとくへははははははははははははははははは  
取收垂へ  
熟したる葉と脇へ後蓋して肉と剥きくきり收  
垂へ生れははははははははははははははははは  
へはははははははははははははははははははははは

ころの虫性阿

七月草と採へしは其葉を以てて凡採根多し八月採

根秋枝系於粘津洞被齒下亦秋採宜也其葉各

限其本葉也とて二月の都り

八月竹と云れハ唯す月令度最の六月有し持也竹と云れハ不乾と云

少くやくその煙少く羊とあはれハ永く不乾ま

書若科乃灰汁を洗ひりそよし海草之し

皮したるも虫をよひら幹後柏矢葉木刀等

七月又棉代種と收まへし布と市し紅糸と用ハ絹布

と染毒をくはしそ外用也

と染毒をくはしそ外用也

此月天象漸冷なり多し生果と食ふく次生蒜維揚

生蜜維子蟹と食ふりかられ又萌芽と食ふりを忌

流泉と飲事かひ人をくして瘰脚軟と好せしむ

八月の古候才一箇周才才之玄智收才三解台

着太白霧乃三候なり才雷如收才五

虫掘戸才去水如酒古秋分乃三候なり

白露登五十二刻十分夜半七刻五十分秋分登五十

刻夜五十分 月令度最

刻夜五十分 月令度最



死より長房これと申すこれ母命の如くなりや  
 あり世人九日と申す毎人少くも此の酒との  
 婦人菜黄囊と著らるは女と申す  
位すかしの五  
 猪乳といふは九月菜黄と佩ひきよのかり菊の花とのむおぼ  
 費長房植菜の定と遊の種と教るといふるれ本由といはれ  
 西系雜記の賦史人の俗見賈佩蘭の中記にありて九月九日蓬  
 と食ひ菊の花とのむゆすれいんをいへて申すなりといはれ  
 下りはてしてを由と云ふ候と位すかしの酒  
 下りててはより植菜の始りたり  
 又月令度歳といはれ  
 と引ててはの菜黄と辟邪氣といふ菊と遊  
 客といふは九月は二つ物とかりて酒九乃忌清  
 とはとちん悪夢とてをいふは後稷とすりにたり  
 周書の國志に九月九日律世射の南り數九か

るはよ俗にけ日と尚んて菜黄房とちて  
 挿む気通氣と辟除して初氣とあせぐささ  
 とさう是なりん西夜なりん又今日菊花酒の西バ  
 長菜のあしむを製法菊を舒る時花を蒸すを  
 たりる黍米にやぶといふこれと確し申す九月九日  
 酒と取あしてこれと飲なこれと菊の花との酒  
 西系雜記のよんをいふ  
 ○五言詩代中の人日と清く上巳櫛平七  
七の節陽の中  
 舞をを製する西代俗多ありて九月九日  
 去る陽教のありとされりこれ古人陽を尚  
 たり

なりとあまのふにたて下りは後西一とては昔人  
乃とてとて下りともつ庵し物な後入るは兼  
とてふは開け玉屋系織女植系もといふ織  
ては由し守その重縁をぬりて

縁平載集より新院別当典信

の事代惟成をて丸多に子代まてめくれ道行るうす  
の重縁をぬりて

あつちまふとては重縁のたて万世をうすは上人  
張甚ゆゑの重縁をぬりて

一見其花は只日羞蕭然経髪不整秋誰(為)為



鳥紗帽 猶倚西風 滿眼愁

趙約月 九日乃得

履齒 蹉跎 印波 海之 空月 落帽 於斜 西風 皓月

催黃 菊林 上 廿二 日 在 菊 祀

杜牧 九日 寄 山 堂 寺 之 侍 小

江 潮 秋 氣 層 初 志 興 空 樓 臺 上 聖 徽 人 世 冠 蓋

平 之 笑 菊 圃 頻 滿 飲 歸 仙 櫓 吹 石 磴 佳 節

不 用 定 心 慈 意 暉 古 竹 今 東 已 出 世 牛 山 何 必

猶沾衣

○今日菊初綻 杖屨 藜杖 以 味 甘 香 之 趣 而 夢 圓

菊 花 九 月 一 變 一 絕 中 九 日 之 一 月 今 廣 義 江 之 方

十日 圓 依 今 日 一 日 是 衣 之 衣 之 衣 之 衣 之 衣 之 衣 之 衣 之 衣

一 日 一 下 一 下 一 下 一 下 一 下 一 下 一 下 一 下 一 下 一 下 一 下 一 下

十二日 倭 依 今 昔 月 紙 畫 以 之 事 中 秋 此 一 一 吉 田

夢 如 後 之 一 八 月 十 二 日 九 月 十 三 日 八 婁 宮 之 一 一 吉 田

淺 明 方 之 一 一 月 之 一 一 月 之 一 一 月 之 一 一 月 之 一 一 月 之 一 一 月

之 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

又 月 且 大 小 之 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

之 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

不 佳 之 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一



これの候月乃とくもたぬも是を元と云ふにけり

後系忠通号法性寺敷九月十三夜既月待よ

用惣寂くしてつとみ月相院院属属務秋秋を巨巨林林の海海の玉玉芳芳院

渡渡雪雪の務務持持家家甚甚経経踏踏石石をを尋尋十十三三夜夜既既勝勝於於教

百年百年究究不不若若公公指指侍侍前前折折回回首首見見渡渡明明此此又又價價平平金

晦日 沐浴

は月相相持持してして血血脈脈とと書書之之一一

上旬上旬小小少少麦麦ととうう下下旬旬にに大大麦麦とと商商へへ一一麦麦冬冬秋秋うう冬冬

夏夏熱熱ととるる秋秋四四附附乃乃氣氣ととうう下下旬旬とと月月令令度度義義ととり

堀堀肥肥饒饒ちちるる取取ららままくくううゆゆ思思ハハ甚甚整整養養志志ととくくハハ之之也也一一

十月以後十二月初まぐちうへ

元元第第とと書書九九月月以以去去一一取取りり九九日日にに乾乾へへ一一十月十月以以後

様様ものものにに臨臨乾乾一一ととりりとと書書之之一一ととりりとと書書之之一一

夏夏候候よりより菜菜八八日日にに乾乾一一冬冬ままととるる夏夏六六臨臨干干一一寸

ささりり但但業業種種落落葉葉新新芥芥ららをを片片ととハハ久久一一ととりり烈烈日

小小布布せせハハ氣氣ううままくくななるるかかええくくんんととりり何何ををくく收收て

臨臨又又平平一一

は月牡丹芍薬及竹法果木とらへ一様と一と月

令令度度義義ととりり農農政政全全書書ととりり凡凡果果木木ととり

ゆゆ小小布布先先九九月月乃乃中中代代後後掛掛ののままりりととちちりりてて繩繩と







